

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤明弘、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第167回哲学カフェ例会(2022.5.12)記録

《いまミャンマーはどうなっているのか、あらためて考える》

「ウクライナより遙か日本に近いミャンマーから、必死の叫び声が聞こえてくる。生々しい報告を聞き、参加者は改めてミャンマーも忘れてはならない、という思いを強くしたようだ。侵略も、弾圧も許せない、と。」

問題提起 吉田 千秋

- ・現在、世の関心は専らロシアのウクライナに対する全面攻撃に対する批判と支援に向けられています。他方、クーデターを行なった国軍による弾圧が続いているミャンマー情勢は、このところすっかり忘れ去られた状態にあります。しかし、国民の平和的な抗議に対する残虐行為は、決して見逃すわけにはいけません。今日は、アドバイザーとして岐阜大学の仲澤教授を迎えて、あらためてこの問題について考えたいと思います。
- ・仲澤さんは、2020年に「仁科記念賞」を受賞された物理学者で、ミャンマーで大学教育の指導をされ、

同国から留学生を受け入れられるなどミャンマーと深く関わってこられました。まず仲澤先生に話を聞いて、その後、参加されている皆さんに質問や感想を述べて頂くことにします。



仲澤和馬さん(左)と吉田千秋さん

報告: 仲澤和馬さん

- ・現在のミャンマーの状況と今後の見通しについて報告したいと思います。
- ・ミャンマー情勢については、ミャンマー人留学生及びその友人、また特定非営利活動法人パルシック関係者を通じて、現地から直接情報を得ています。
- ・対決姿勢を強める不服従の民間人に対する国軍の弾圧は激しさを増しています。組織的な抵抗を試みる人々だけでなく、非協力的と見なされた公務員は解雇され、国軍の意に沿わない報道をするジャーナリストは逮捕され、拷問を受けたりしています。密告を奨励して、市民の間に相互不信の空気を作り出したり、不法逮捕が横行したり、医療従事者やボランティアを摘発したりする陰険な方法を用いるなど、抵抗勢力を弱体化するために国軍は手段を選ばなくなっています。
- ・厳しい弾圧にも拘らず、国民の大多数は断固として国軍による軍政を拒否しています。市民の抵抗は全国的規模で続いていて、抵抗の仕方も不服従や抗議デモ

以外に、武力闘争が活発化しています。スーチー氏の国民民主連盟の流れを汲む民兵組織“国民防衛隊”は、一般市民と協力し合いながら、これまで長く国軍から弾圧されてきた多数の少数民族武装グループと連携し、国軍と対決しています。その分犠牲者の数も多くなっていて、これまでに推計で10数万人が死亡したと言われています。

- ・私の身边からも、2019年から20年にドクターコースに在籍した学生が学業を中断し、抵抗軍に加わるために帰国しました。当初は連絡可能でしたが、その後音信不通になっています。抵抗を試みる者の状況は非常に厳しくなっています。内通者もいて、逮捕された場合、裁判なしに処刑されるケースも珍しくありません。
- ・さて、今回のクーデターの背景について簡単に見ておきます。2016年アウン・サン・スーチー氏率いる国民民主連盟(NLD)が、総選挙で獲得可能な議席の8割近くを得て大勝し文民政府が誕生しました。だが、政府の

写真提供 箕浦秀樹さん(岐阜大学名誉教授) 昆虫、鳥の写真は、友人の箕浦秀樹さん(岐阜大学名誉教授)に提供していただきました。野鳥などの写真展もされた人で、このたび15枚送信してくれました。できたら順次掲載したいと思っています。



アオスジアゲハ

権限は初めからかなり制限されたものでした。国軍の政治介入を抑えたいスーチー国家顧問は、国の安全保障や軍に関わる問題を審議する国家国防治安評議会を、メンバーの半数の11名が軍人によってために、開こうとしませんでした。

- また、国軍による過酷な迫害の結果、イスラム教の少数民族ロヒンジャが大挙して隣国バングラディッシュに逃れる事態が諸外国から厳しく批判(虐殺、民族浄化)されました。スーチー国家顧問は国際司法裁判所にて、ジェノサイドを否定、しかし一部で虐殺があった事を認める証言し、自らの責任を真っ向から否定する国軍は強い不満を抱いたと言われています。さらに、軍政時代から鉱物資源の管理で中国と良好な関係を築いて来ましたが、スーチー氏が対中外交で決定権を取り戻そうとすることに危機感を募らせていました。
- そして、民政移管後二度目となる直近の総選挙の結果、スーチー氏率いるNLDが前回を上回る約83%の議席を獲得し圧勝し、逆に国軍系の“連邦団結発展党”が33議席しか得られなかった。その結果に強い危機感を抱いて、国軍はその受け入れを拒否するだけでなく、憲法の規定を悪用して、一方的に選挙の不正を訴え、クーデターを実行しました。スーチー氏やウイン・ミン大統領を始め、NLDの幹部は職権乱用を理由に逮捕され、国政から排除され、国軍が主導する臨時政府が権力を掌握しました。
- 国軍は独自の経済的基盤を持っていて、一般国民の支持に依存していません。それ故に、抵抗する一般市民

を容赦なく弾圧することを躊躇しません。独立以来、国軍は国政に大きな影響を及ぼして来ました。まるでミャンマーという国家の中にもう一つ別の国家がある様な様相を呈しています。

- 国民の90%以上が軍政を拒否し文民政府の復活を望んでいます。だが、民主化の体現者であるスーチー氏は身柄を拘束され活動できない状況にあります。国軍の支配に抵抗し民主化を担い手となることを期待されるいわゆるZ世代の若者たちは、指導者を持たないまま、フェイスブックなどソーシャルメディアを通じてつながって活動しています。彼らは抗議活動をするだけでなく、納税や公共料金の支払いを拒否するなどして、国軍に徹底抗戦の姿勢を示しています。
- 国軍によって国政から排除されたNLDのメンバーを中心とした民主派は、国民統一政府の下で異なる民族が共生する民主的な連邦国家を目指しています。彼らの多くは、最終的に、連邦軍を創設し、国軍は解体されなければならないと考えています。国軍は、民主派と少数民族との共闘を妨害するために、武装闘争を続けてきたカレン民族を懐柔しようとしたましたが、その試みはうまく行きませんでした。NLDを中心とする民主派は既に少数民族と協力し、一部地域を支配下に置くことに成功しています。
- クーデターに対する国際社会の対応は国によって異なりますが、クーデター後に、国軍の“国家行政評議会”に対抗して、民主派の作った“国民統一政府”は、欧米の幾つかの国から承認を受けています。日本に関して言えば、日本政府は首尾一貫しない対応を取っていると批判されています。日本の防衛大学校は、民主派を支持する在留ミャンマー人の抗議にもかかわらず、相変わらず国軍の派遣する留学生を受け入れています。ミャンマーがメンバーとして属するASEAN東南アジア諸国連合は、国軍の派遣する代表の受け入れを拒否していますが、経済利権を重視する中国は、事実上、軍事政権の代表を受け入れています。
- 民政復活に必要なことは何でしょう。まず国軍の収入源を断つ必要があります。民主派の国民統一政府への協力も重要です。またミャンマー市民に援助の手を差し伸べることも欠かせません。例えば、在留ミャンマー人の料理店が東京の池袋にあります。お店の利益は民主派の支援金となります。東京に行く機会があったら、ミャンマー料理を楽しんでください。今後、様々なかたちでの協力をお願いします。

<意見交流>



* 2019年、個人として戦没者を追悼する積りでミャンマーを訪れた。1914年生まれの父親が上海の部隊にいてビルマ戦線に派遣された。父親は無謀な計画で大失敗に終わったインパール作戦に参加することになっていたが、急性盲腸炎になって急遽入院したために、作戦に加わらずに済んだ。おかげで父は、多くの日本兵が犠牲となった戦線に加わらず助かったと言えるかもしれない。退職した後、父親の思いを引き継いで、戦友の追悼のためにミャンマーを訪問した。貧しさが至る所で感じられる国だった。道を走る日本の中古車(見慣れた岐阜バスの車両も)が沢山見受けられた。中国の影響が強いのが感じられた。

* ミャンマーは鉱物資源が豊富で、資源を確保したい中国は、クーデターのあった1988年以降も軍政に対する西側諸国の制裁に加わらず、経済関係を維持した。

* スーチー政権が誕生した2016年以降多くの日本企業がミャンマーに進出した。また民間レベルでミャンマーと人的交流が行われてきた。岐阜大学はマンダレー大学と交流があって、数々の留学生を受け入れてきた。クーデター後、指導していたミャンマー留学生が国軍に対する武装闘争に参加するために帰国した。

* ミャンマー人の民族性なのか。現地に留まっている人たちは、元々立場を同じくしていた者でも、一旦国外に逃れた者に心を閉ざす傾向がある。長く離れている者は元のように受け入れて貰えない。

* クーデターを決行した幹部に対する反対者は国軍内にいない。軍は上から下まで縁故で繋がっていて、ほと

んど皆同じ方向を向いている。仲間割れによる軍内部からの崩壊は期待薄である。

* 国軍の会社経営から経済的に得をしているのは

少数の者だけだが、末端の兵士も上下関係を通じて金を持っている者となつがっている。

* 国軍の規模はどれほどのものなのか。軍隊はどここの国でも基本的に階級社会で、はっきりと将校と兵士に分けられる。将校と兵士では考え方も大きく異なる。将校は軍人の家系が比較的豊かな家庭の出身者が多く、反対に兵士は余り豊かではない家庭の出身者が多数を占める。社会情勢の変化によって、軍内部に対立が生じる可能性は常に存在すると思われる。兵士は自分たちと同じ様な家庭の出身者である一般市民に銃を向けるに抵抗感を持つはずである。

* ミャンマー軍は総勢40万程である。兵士は、徴兵され軍に入った者たちではなく、志願して軍人になった者たちである。兵士は軍内部の徹底した教育で国軍の世界観を植え付けられていて、抵抗する市民を殺すことも躊躇しない。

* つい先日、フィリピンではかつての独裁者マルコスの息子が昔の記憶の無い若い世代に支持されて新しい大統領に選ばれた。フィリピンでは軍が内部分裂し、マルコスは軍を味方にする事ができず亡命を余儀なくされた。市民による政権打倒は、野党の指導者が亡命先の米国から帰国した空港で暗殺されたことに反発し、国民が大規模な抗議活動を展開して始まった。軍出身の国防大臣はマルコスを支持したが、参謀総長は大統領のために軍を動かすことを拒否した。

* Z世代の若者は、軍が容赦なく市民に銃を向ける現状で、不服従や平和的な抗議活動ではなく、武力で対抗する以外に方法は無いと考えている。

* スーチー氏の父親であるアウン・サン将軍は建国の父と呼ばれる人物で、軍の中にスーチー氏に特別の感情を持っている人たちもいるのではないかと。分裂の可能性は無いのか。

* 軍の幹部候補生が未だに日本の自衛隊で訓練、教育を受けている。在留ミャンマー人を始め民主派を支援する日本人は、政府に自衛隊がミャンマー人を受け入れることを停止する様に訴えている。しかし受け入れはまだ停止されていない。

* ワシントンで米国が参加してASEAN(東南アジア諸国連合)の首脳会議が開かれる。ミャンマーの国軍代表は会議に呼ばれなかった。ASEANもミャンマーの扱いに苦慮している。東南アジアは民主制が定着している国と一党独裁的な国との差が大きい。その差によって、ミャンマーのクーデターに対する見方も違っている。



オオヨシキリのさえぎり

＜意見交流の最後に＞ 吉田千秋

・ウクライナの戦争に目を奪われがちですが、ミャンマーの問題があることを忘れないようにしたいものです。民主主義を大事にすることに国境はありません。ウクライナ問題とともに、ミャンマー問題でも、日

本政府には平和憲法の精神に立った毅然とした対応を求めたいと思います。そして、私たち一人ひとりがミャンマーの人たちの苦難をしっかり受け止め、自分なりの支援の手をさしのべたいと思います。

＜例会感想、意見、便りなど＞

○＜前号(No.165)を読んで＞

添付の庭のお花の写真を眺めながら、久しぶりにプリントアウトして天皇制・皇室についての皆様のご意見読ませていただきました。男系に限るなどと言っているは何代も経たないうちに皇室も絶えるやもしれません。それでよいというならそれでもよし、継続して残したいなら工夫をして皇室典範を変えねばならないのは当然。血筋が消滅したら形骸だけ残るか、文化遺産みたいな扱いになるか。

内田樹氏の言われるように現在の天皇家は籠の鳥のように自分たちの思うようには生きられず、名字も持たず、私的な個人を犠牲にすることを強いられています。それを認めて生きておられる皇族は良いですが、忍耐できない方たちは変質されて行っても仕方なし。今後天皇制は社会の形に応じてその時その時で変質していくとは思っています。

(Kozue.Taki)

○＜ZOOMによる参加＞

こんばんは。先程は、「みんなで哲学」で貴重な時間をいただき、ありがとうございました。中澤先生のお話はとてもわかりやすく、歴史的な流れもつかめるようにお話してくださったので、とてもよかったです。初めて聞くことばかりでした。

現在はNUGが国軍に対立する勢力をもってきていて、Z世代が立ち上がっているということを知り、驚きました。軍事政権には立ち向かう術がないと思い込んでいたからです。「戦争は悪である」という平和の捉え方は、本当だろうかというようなことを、少し前にどこかで読んだのですが、それが引っかかっていました。ミャンマーのような国では、戦いで、より良い世の中を求める運動をするのが、現実を変えていくのかもしれませんが。

私たちもまだまだ考えないといけませんね。これ



アキアカネの産卵

からの動きを見ていきたいと思いました。とても素晴らしい機会をいただき、ありがとうございました。

(杉山喜美江)

○＜力でなく話し合いで解決を＞

私たちは文化人です。学校の道德の授業で、人と仲良く暮らすことや温かい思いやり、また、人を傷つけることは良くない、力ではなく話し合いで解決することなど学びました。戦争が悲惨であることも知っています。なのに、戦争が起きる。人を傷つけることを指揮する。何でこんなことが起きるのか!!

ミャンマーの報告を聴きながら、欲望なのかと思いました。人間が持っている欲、人間って怖いです。そういう人や国の暴走を止めるには、地道に一人一人に問いかけることでしかないのでしょうか？ マザーテレサやガンジーのように武器ではなく愛で..制裁は違います。

(子猫)

○＜自分なりにミャンマー支援を＞

今回の「カフェ」では、狂気のプーチン・ウクライナ侵攻でかき消されてしまった感のある、ミャンマー独裁政権の残虐非道の限りを、仲澤先生の肉声として聞くことができた。我々も身近なところで、ミャン



アマサギ

マーの軍事政権と戦っている人達が多くいることを知った。日本政府は欧米同調型のウクライナ支援外交ばかりではなく、ミャンマー独裁政権の制裁外交も展開すべきであることを痛感した。微力ながらカンパ支援活動にも参加したい。(MS)

○<どこの国の難民も平等に>

例会でいまミャンマーがどのような状態にあるか知りました。最近釈然としないのは、ウクライナ人難民に比べてミャンマー人難民やクルド人難民等々に対する日本政府の対応があまりに酷いということです。こんなにあからさまな差別の理由はウクライナ人が白人でキリスト教徒だからだと思いますが、地政学的に考えればウクライナよりミャンマーのほうが今

後の日本にとってはるかに重要です。またアメリカの要求もあるのでしょう。いろいろ考えていると

日本が独立した主権国家になれるのはいつの日かと思ってしまいました。(たなか)

○<さらにフィリピンへも目を向けたい>

ミャンマー(緬)とフィリピン(比)この二つの国、ともに民主化のための苦難を経験した。比では1986年21年間続いたマルコス(父)による独裁政治が100万人ともいわれた民衆デモ=エドサ革命で倒れたが、その過程で政敵の暗殺など政治弾圧で多くの血が流れた。幸い、86年以降は選挙で選ばれた文民による政権が続いた。しかし、近年の比の民主主義は異常事態だ。今回の子マルコスの大統領当選もその典型。彼は「公約らしい公約」もなく、他の候補との政策討論会には全く出席せずに、「フェス」紛いの大集会を開いて、選挙では3100万票を獲得し他を圧した。

その元はこの国名物の「票の買収」、さらに、彼が大統領になれば、滞納している税金(長男が5千億円、一家で5兆円、ただし係争中)がチャラになる、とのオマケまで新聞は報じている。その税とは父の残した莫大な遺産にかけられた相続税。こちらでも、露骨な金権不正が止まらない。

(フィリピンウオッチャー)

<この一本>ケネス・ブラナー監督『ベルファスト』(原題”BELFAST”)2021年イギリス映画

舞台は1969年の北アイルランド・ベルファスト。この年の8月ベルファストでは、プロテスタント系住民とカトリック系住民の対立が激しくなり、多数の死傷者が出る衝突や商店の略奪が頻発し、軍が出動した。それまで仲良く暮らしていた住民が、ある日を境に突如いがみ合う様子を、主人公のバディ少年(9歳)とその家族(プロテスタント)を通して描いている。家族の誰もが人々の心が通っていたベルファストの街を愛し、住民の衝突にもかかわらずそこに住み続けようとする。しかし自分たちの眼前で起きた略奪に巻き込まれてしまったことから、ついに街を出るところで物語は終わる。

映画は衝突の原因について詳しくは語らないが、普通の市民がある日「突然」暴動や略奪に巻き込まれ、あるいは積極的に加わる恐ろしさをリアルに描い

ている。そしてバディの父母や祖父母など、その理不尽さに抗い、宗教の別なく市井の心豊かな暮らしを守ろうとする人々の姿もしっかりと描かれている。バディもその中でいろいろなことを学び成長している、映画を観ている自分もい



ろいろ考えさせられた。

最後に、この映画はケネス・ブラナーの自伝的作品と言われる。彼もベルファストに生まれ、同じ69年9歳のとき家族で故郷を離れている。その記憶の世界だ

からだろうか、ほぼモノクロで進む映像と全編を流れる同郷のヴァン・モリソンの曲が、「9歳」が見たベルファストをリアルに感じさせるのも不思議だ。

(井川敏郎)

＜お薦め番組＞NHK・Eテレ「サンデル白熱教室」 土曜午後9:30～10:00



十数年前ハーバード大学でマイケル・サンデル教授の「正義」の講義が対話形式で行われ、履修者14,000人の大人気となり、大学はこの科目を一般公開し、PBS(アメリカの放送局)で放送された。それが2010年、NHK教育テレビで「ハーバード白熱教室」(全12回)として放送された。その後 マイケル・サンデル氏は日本に来て、東大などで講義し、NHKテレビで紹介された。

(M・サンデル教授、Wikipediaより)

今回のシリーズではパンデミック対策、国家の役割、民主主義、ジェンダー、教育改革などについて、アメリカ(ハーバード大学)日本

(東大・慶応)中国(復旦大・清華大)の学生それぞれ6～8名ずつ参加し、リモート形式で若者たちと討論を交わした。

5月14日(土)放送のテーマは、①中国での「共同富裕」の提起、②(それぞれの国で)国家を信頼すべきか? だった。①については、富裕層から寄付を募り低所得層の支援や農村部振興のために使う政策について話し合われた。

中国の学生からは、「賛成」「良い方向だ」との意見が出た。アメリカの学生からは、「アメリカにも、同様の民間制度がある」「税金か、寄付金か問題となるところだ」という意見が出された。学生たちの発言は、それぞれの国の歴史と現況を無意識的に背負って出てきた意見のようである。異なる背景と異なる意見の中に、サンデル氏は共通の場を見出そうとしているように感じられた。

(アダム・スミス)

＜この一冊＞ 朴沙羅著『ヘルシンキ生活の練習』筑摩書房 2021.10刊

在日コリアンであり、社会学者の朴沙羅さんが、2人の小さな子どもを連れてフィンランドで暮らし始めたときの体験を書いたルポです。

これは、北欧バンザイな一冊ではありません。お洒落なエピソードは全く出てきません(笑)。フィンランドでは、税金も高いけど物価も高いからあまり余裕はありません。また、(ロシアの脅威があるから!)兵役の義務があるなど、日本にいる私にとっては意外なこともありました。こういう部分も読んでいて興味深かったです。

そして、よく知られているように、フィンランドには、生活に概ね納得していて幸せだ、と思っている人が多いです。それは何故なのか。この国で筆者が出会う人たちは、全体的にドライです。問題があって困り果てていると、「あなたに今足りていないのはこれですね」と淡々

と指摘して差し出す。そして、困ったら助けを求めないといけません!と諭される。

「自助」という概念はフィンランドには無さそうです。幸福って、物質的に満たされている事ではない。不幸が起こらないということでもない。何かあっても大丈夫!と、安心出来ればいいんだ。と感じました。

(Peace佳織)



＜大阪だより その6＞「カジノはアカン、それで大阪が良くなるわけない！」

大阪では、今、「IR誘致の是非を問う住民投票を求め署名」が成功してホッとしています。このまま維新多数の大阪府・市議会を放っておけば、いつの間にか大阪にカジノができて、湯水のように税金が投入され、コロナ禍以後インバウンドで外貨が入る期待はできず景気は上がらず、日本人のカジノ依存症や多重債務者が増えてよりが悪くなるやんか！という思いから始められました。地方自治法に基づく条例制定の直接請求署名として、3月25日～5月25日の62日間に、府内有権者の1/50の約15万人分、市区町村ごとに署名簿があり、居住地域でしか集められない複雑さです。カジノ反対の多様な団体が一致団結して始めたわけでないため、かなり無謀な挑戦でした。

成功はしたけど、有効署名数が確認されれば、知事は住民投票実施の条例案を府議会に提出する義務があるだけで、条例が成立するか、住民投票に法的拘束力がつくか、住民投票で勝てるか、カジノ反対運動は続きます。

私は保育園ママ友などに頼みましたが、関西のマスコミは維新批判の報道をしないので、署名活動自体が知られずから説明する必要あり苦勞しました。ママ友らと話して、ラスベガスみたいな煌びやか観光地ができて、USJみたいに遊びに行ってもいいかなと思われ、大金を擦っても（住民投票署名呼びかけ）ギャンブル依存症になっても本人の自業自得で、自分らとは無関係と思われると気付きました。しかし、弁護士としては、依存症は孤独からはまって脳機能の病気である、多重債務で破産も、私も誰でも陥る可能性があると感じています。

（宮本亜紀）



哲学カフェdeぎふ 13周年記念討論会
 テーマ「ウクライナ侵攻から平和を考えるー歴史の順行と逆行ー」

* 泥沼化するウクライナ戦争、それに乗ずる日本での軍拡・核共有の声高な主張。この方向で危機を乗り越え、平和は得られるのか？ 科学技術の戦争利用に警告を発し、武力なき平和を訴え続けてこられた池内先生の話聞いて、みんなで考えましょう。

＜日時＞ 8月11日(木・祭) 午後1:30～4:00

＜会場＞ 長良川スポーツプラザ大会議室 〒502-0817 岐阜市長良福光2070-7

＜資料代＞ 500円(若者は無料)

いけうち さとる

＜講演＞ 池内 了さん

1944年兵庫県生まれ。京都大学理学部卒、同大学院博士課程修了。名古屋大学名誉教授。宇宙論・科学技術社会論。「世界平和アピール七人委員会」委員、「九条の会」世話人、「中日新聞コラム〈時のおもひ〉」執筆者で、平和のための活動を精力的に行っている。著書に、『疑似科学入門』（岩波新書）、『宇宙論と神』（集英社新書）、『科学者と戦争』（岩波書店）、『兵器と大学——なぜ軍事研究をしてはならないか』（岩波ブックレット）、ほか多数。



＜コーディネーター＞
 吉田千秋

「哲学カフェdeぎふ」主宰者
 1943年大阪市生まれ。京都大学文学部哲学科卒、名古屋大学大学院博士課程修了。元岐阜大学地域科学部教授(哲学)。名古屋哲学セミナー常任講師。「岐阜・九条の会」代表世話人、岐阜平和美術展会長。

哲学カフェ 第27期(2022年前半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00～9:00 ふれあいスペース
⇒ コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第166回例会 4月14日(木)	「天皇制・皇室のいま、これからどうするの？」 *昨年メディアがむやみに取り上げた眞子さん結婚問題。放っておいたら良いのに。 *肝心の女性天皇や女性宮家の問題については、まともや放置。どうするのかね。	終了 しました
第167回例会 5月12日(木)	「いまミャンマーはどうなっているか、あらためて考える」 *ウクライナ侵略とともに、忘れてはいけないミャンマー軍政の弾圧。国民の抵抗も続け *今回、ミャンマーへの大学教育支援、留学生の受け入れなどを長年行ってこられた仲清 卓大・物理学)に話していただき、意見交換します。	終了 しました
第168回例会 6月9日(木)	「18才成人」問題を考える *今年4月から、成人年齢が18才からとなる。世界から取り残されていたがやっと18才になる。 *だが、選挙権と同じく問題がいろいろある。それにしても、そもそも大人ってなんだろうか。	
第169回例会 7月10日(日)	「参議院選挙を終えて・明日はどうなる？」 *岸田内閣になって何の成果もないのに支持率上がり、軍拡路線を邁進。 *野党は共闘が十分に組めないまま選挙へ。結果を見て明日を考えよう。	
第170回例会 8月11日 (木・祭)	「開設13周年記念」講演・討論会 *3年ぶりに記念行事を開催。8月11日(木・山の日)、午後。長良川スポーツプラザ大会議室。 *講演は池内了先生(名古屋大学名余教授・宇宙物理学)←4年前に続いて。 *テーマは「ウクライナ侵攻から平和を考えるー歴史の順行と逆行ー」	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



わいわいがやがや

アラカルト

★5月の畑は賑わしい。イチゴが実をつけ、ジャガイモは白や薄紫の花を咲かせ、玉ねぎは収穫期を迎える。夏野菜のナス・キュウリ・カボチャ・スイカなどの苗も畝に揃う。だからなかなか忙しい。

★これらの野菜、近年品種改良が盛んで、毎年新品種が出てくる。土を触ったことのない人でも、イチゴの濃姫とか章姫・あま王等の名はご存じだろう。新品種を試すのも楽しみで、我が農園ではジャガイモだけでも5品種作っている。

★穀物だけでなく野菜も収穫物のほか種子としても国境を出入りしている。だから、あちらの新品種を日本で栽培し、こちらの品種が海外で作られ出回る。フィリピンで食べたイチゴがそれで、日系人が栽培していると聞いた。

★最近のウクライナ戦争とも重なって、今後食糧危機が必至との観測がある。ウクライナやロシアからの小麦輸出ストップが主因という。スリランカではもう飢餓が始まっているとの報もある。

★そんな折、供給不足を補う米産や加産の増加が期待されるが、そのカナダの小麦はウクライナ移民が大きな役割を担っていると知った。

★歴史上最も高い生産力を持つ今世紀、人為的要因に起因する飢餓なんて「悪い冗談」過ぎる。なんとしても止めたい！ 迫りくる食料危機には、まずは停戦！ 矛を収め、軍事費削り、各国で基本食糧の原則自給を目指す以外にない。

★国連にも専門機関があり、今やその機能を本格的に動かすべき時だ。今日的農業技術の移転と適切な人員配置が強力な推進力になるだろう。

(大橋健司)